

社会調査のデータ解析テキストをめぐる課題

— 学生インタビューの結果から —

保 田 時 男

1. 本稿の課題
 - 1-1. 社会調査士資格
 - 1-2. 「社会調査の」データ解析の特異性
 - 1-3. 実調査データを用いた教育の必要性
2. 学生へのインタビュー調査の方法
3. 学生調査からわかる課題の断片
 - 3-1. 関心の強い／弱い調査項目
 - 3-2. 学生がテキスト一般に求めること
 - 3-3. 学生がデータ解析のテキストに求めること
4. 結 論

1. 本稿の課題

本研究ノートは、社会調査士資格の取得をめざす学生に調査データの解析方法を教示するテキストを作成する上で、どのような課題があるのか、その一端を明らかにしようとするものである。社会調査士資格の取得をめざす学生へのインタビュー調査をもとに、学生の視点から教員が見落としがちな課題を探る。学生の視点からテキストに関する課題を明らかにすることで、効果的なテキストを作成する足がかりとなると考えられる。

1-1. 社会調査士資格

社会調査士資格について簡単に説明をしておく必要があるであろう。社会調査士資格は、社会調査士資格認定機構（以下、認定機構と略記）が、一定の要件を備えて大学を卒業し、社会調査に関する基礎的な知識・技能、相応の応用力と倫理観を身につけた者に対して認定する資格である。認定機構は、日本教育社会学会・日本行動計量学会、日本社会学会の3学会が相互協力のもとに設置準備を行い、2003年11月に発足した。

まだ実績のない資格制度であり、国家資格ではないので何らかの職域占有権を有しているわけではない。しかしながら、多くの大学機関が社会調査士資格に対応したカリキュラムを作成し、制度の推進に協調している。2006年度に、認定機構に対して社会調査士対応科目の認定申請を行った機関は、150に上る。

認定機構が配布しているパンフレットの中では、「社会調査士資格認定機構の目的」が以下のように述べられている。

本機構は、大学・大学院等における社会調査教育の向上を図り、社会調査知識と技能をもつ人材の供給と、実務に携わる者に対する研修あるいは社会調査の重要性に関する啓発活動を通して、社会の期待に応えることを目的として設立されました。

本機構では、社会調査に関する基礎的な知識・技能、相応の応用力と倫理観を身につけた人材に対し「社会調査士資格」を認定いたします。また、より高度な専門知識・技能、倫理観はいうでもなく、社会調査の企画設計から報告書の作成に至る高度の実践的能力を身につけた人材には「専門社会調査士資格」を認定し、社会調査の質的向上に貢献してまいります。

この中で「社会調査の重要性に関する啓発活動」を行うことを記していたり、「倫理観を身につけた人材」に対して資格を認定することを記していたりするのは、社会調査の適切な運用が損なわれているという危機感の現われである。いわゆる「アンケート調査」が世の中に広まるにつれ、社会調査の手法が意図せずに誤って運用されることが急増した。あるいはより積極的に悪徳商法のために流用されていることもある。社会調査士資格の設置には、このような状況を食い止める狙いが含まれている。

具体的に社会調査士資格を取得するためには、認定機構の定める標準カリキュラムに対応した科目を大学等の機関で受講し、単位を取得しなければならない。標準カリキュラムは表1のとおりであり、F科目とG科目は一方の選択でよい。本稿で対象としている調査データの解析に関する科目は、この中でC～E科目に関わっている。

表1 社会調査士標準カリキュラム

<p>【A】 社会調査の基本的事項に関する科目</p> <p>社会調査の意義と諸類型に関する基本的事項を解説する科目。社会調査史、社会調査の目的、調査方法論、調査倫理、調査の種類と実例、量的調査と質的調査、統計的調査と事例研究法、国勢調査と官庁統計、学術調査、世論調査、マーケティング・リサーチなどのほか、調査票調査やフィールドワークなど、資料やデータの収集から分析までの諸過程に関する基礎的な事項を含む。(90分×15週)</p>
<p>【B】 調査設計と実施方法に関する科目</p> <p>社会調査によって資料やデータを収集し、分析しうる形にまで整理していく具体的な方法を解説する科目。調査目的と調査方法、調査方法の決め方、調査企画と設計、仮説構成、全数調査と標本調査、無作為抽出、標本数と誤差、サンプリングの諸方法、質問文・調査票の作り方、調査の実施方法(調査票の配布・回収法、インタビューの仕方など)、調査データの整理(エディティング、コーディング、データクリーニング、フィールドノート作成、コードブック作成)など。(90分×15週)</p>
<p>【C】 基本的な資料とデータの分析に関する科目</p> <p>官庁統計や簡単な調査報告・フィールドワーク論文が読めるための基本的知識に関する授業。単純集計、度数分布、代表値、クロス集計などの記述統計データの読み方や、グラフの読み方、また、それらの計算や作成のしかた。さまざまな質的データの読み方と基本的なまとめ方。相関係数など基礎的統計概念、因果関係と相関関係の区別、擬似相関の概念などを含む。(90分×15週)</p>

<p>【D】社会調査に必要な統計学に関する科目</p> <p>統計的データをまとめたり分析したりするために必要な、基礎的な統計学的知識を教える科目。確率論の基礎、基本統計量、検定・推定理論とその応用（平均や比率の差の検定、独立性の検定）、抽出法の理論、属性相関係数（クロス表の統計量）、相関係数、偏相関係数、変数のコントロール、回帰分析の基礎など。（90分×15週）</p>
<p>【E】量的データ解析の方法に関する科目</p> <p>社会学的データ分析で用いる基礎的な多変量解析法について、その基本的な考え方と主要な計量モデルを解説する。重回帰分析を基本としながら、他の計量モデル（たとえば、分散分析、パス解析、ログリニア分析、因子分析、数量化理論など）の中から若干のものをとりあげる。（90分×15週）</p>
<p>【F】質的な分析の方法に関する科目</p> <p>さまざまな質的データの収集や分析方法について解説する科目。聞き取り調査、参与観察法、ドキュメント分析、フィールドワーク、インタビュー、ライフヒストリー分析、会話分析の他、新聞記事などのテキストに関する質的データの分析法（内容分析等）など。（90分×15週）</p>
<p>【G】社会調査の実習を中心とする科目</p> <p>調査の企画から報告書の作成までにまたがる社会調査の全過程をひととおり実習を通じて体験的に学習する授業で、量的調査でも質的調査でもいい。演習で行っている実習も含む。調査の企画、仮説構成、調査項目の設定、質問文・調査票の作成、対象者・地域の選定、サンプリング、調査の実施（調査票の配布・回収、面接）、インタビューなどのフィールドワーク、フィールドノート作成、エディティング、集計、分析、仮説検証、報告書の作成。また、実際にアプリケーション・ソフトを利用した量的データの統計的分析の実習、もしくは、質的データの分析ないし事例研究を行う実習を含む。（90分×30週）</p>

1-2. 「社会調査の」データ解析の特異性

社会調査に限らずデータ解析の技術は、さまざまな方面で役立つが、特に「社会調査の」データ解析には、同じデータ解析でも他の分野にはないいくつかの特異性がある。第1に、社会調査で収集されるデータは、そのほとんどが質的変数（カテゴリカルな変数）からなっている。多くのデータ解析のテキストは、量的変数からなるデータを前提として、基本統計量や平均値の差の検定、回帰分析などからはじまる分析について解説を行っているが、社会調査のデータ解析においてはクロス表をはじめとする質的変数の分析手法の重要性が高い。最近では、太郎丸がこの点に注目し、質的変数の扱いに焦点を絞ったテキストを発行しているが¹⁾、依然として質的変数の基本的な分析方法を解説したテキストは不足している。この点は、社会調査のデータ解析に関するテキストを充実させなければならない理由の1つである。

社会調査のデータ解析の第2の特異性は、本格的なデータ解析以前に行うデータの加工や整理に手間がかかるとともに、その扱いに注意が必要なことである。社会調査で知り得たいことは何らかの社会現象についての情報であるが、直接的に社会を測定することは難しいので、実際にはその社会に暮らす1人1人の個人から情報を収集する。そのため、本来求めている情報が直接的に得られるわけではなく、間接的な情報を工夫して取り扱い、知りたい情報へと変換しなければならない。他の分野のデータ解析においても多かれ少

1) 太郎丸博『人文・社会科学のためのカテゴリカル・データ解析入門』ナカニシヤ出版、2005。

かれ同様の問題は生じるが、社会調査のデータ解析においてはそのハードルが比較的高い。特に、社会的に敏感な問題（例えば、差別問題やプライバシーに関わる問題）について扱う場合には、さらに間接的な方法で情報を収集せざるをえなくなる。そのような理由で、社会調査のデータ解析においては、間接的な形で収集したデータを本来の目的に沿う形に戻してやるデータ加工や整理の技術がもつ重要性が高い。しかしながら、このような点について十分に解説をしているテキストは少なく、また解説があったとしても、統計ソフトの操作方法という具体的な水準に解説が終始しており、どのような考え方でデータを加工・整理すべきかを示す理論が説明されていない。この点も、既存のテキストでは十分でないと考えられる理由の1つである。

社会調査のデータ解析の第3の特異性は、データ解析を学習しようとする学生が前提として習得しているはずの知識や技術について、あまり多くのことを共有できないという点にある。例えば医療統計におけるデータ解析であれば、医療に関する基礎的な知識をどの学習者も習得しており、また自然科学系の分野に進んでいることから一定の数学的素養をもっていることなどが期待できる。これに対して、社会調査のデータ解析を学習しようとする学生はその専攻分野が多岐にわたるので、基礎的な知識の共有を前提とすることができない。大まかに社会科学系の知識をある程度有しているであろうことが期待できるのみである。そのため、実は適切なテキストが作成しにくく、心理学のデータ解析のためのテキストが流用されたりすることがよく見られる。この点も既存のテキストでは不十分と考えられる理由である。

1-3. 実調査データを用いた教育の必要性

社会調査のデータ解析に見られるこのような特異性から生まれる問題を解決する1つの有効な手段として、汎用的な実調査データを用いたテキストの開発が考えられる。具体的には、総合的社会調査JGSSのデータを例示、演習問題などに用いたテキストが、有効な教材となりえる。

JGSSは、アメリカのGeneral Social Surveyを模範として、日本人の日常行動と生活意識を一般的に把握することを目指して行われている、オムニバス形式の反復横断調査である。JGSSプロジェクトは、1999年に大阪商業大学比較地域研究所が当時の文部省から学術フロンティア推進拠点の指定を受けたことにより始まり、東京大学社会科学研究所を主な協力機関として進められている。研究代表は、谷岡一郎（大阪商業大学教授・学長）と仁田道夫（東京大学社会科学研究所教授）である。2000年から継続的に全国調査を行っており、2006年度で第6回の調査を向かえる。詳しい情報は、JGSSホームページ (<http://jgss.daishodai.ac.jp>) や各年度の調査コードブックから参照できる。

社会調査データを素データの水準で公開する動きは、日本でも近年活発になってきたが²⁾、JGSSデータは研究目的に限らず、学生に対する教育を目的とした利用に関しても、無償でその素データの使用を認めている。このような調査データは、非常に稀である。

実際の社会調査であるJGSSのデータを用いることは、先にあげた問題点に対して次の

2) 佐藤博樹・石田浩・池田謙一編『社会調査の公開データ 2時分析への招待』東京大学出版会、2000。

ように有効に作用すると考えられる。第1点目の質的変数を重視する必要があることに関しては、実調査データである JGSS データを用いる以上、必然的に質的変数のデータ解析を理解することが求められる。実際の調査票・調査データを通して質的変数を中心としたデータの収集・解析を学習することができるであろう。

第2点目の、データの加工・整理の解説が必要という点については、データ解析の解説がしやすいように作成した仮想データ（あるいは加工データ）を用いる場合と異なり、収集されたままの素データを扱うわけであるから、やはり必然的に学習者はデータの加工・整理の問題に直面することになる。実データを扱う中で自然にこれらの重要事項を学習することが期待できる。

第3点目の、前提として共有できる知識・技術が少ないという点については、その代わりに調査データを共有するという解決を図ることができる。つまり、JGSS データという共有知識を設定してやり、JGSS データを用いたテキストでデータ解析を学習するという道筋を作るということである。JGSS データは、特定の分野に偏りの少ない総合的社会調査であるから、幅広い専攻分野の学生に対応可能であるし、また、教員が専攻分野に合わせた教育の工夫を行うことも比較的容易であると考えられる。

以上のような理由から、JGSS データを用いて社会調査のデータ解析を解説するテキストを作成することは、既存のテキストにはないメリットをもっていると考えられる。本研究ノートは、JGSS データを用いたテキストを作成するという企画を前提として、学生へのインタビューを通して、学生の視点からより効果的なテキストを作成するための課題を明らかにしようとするものである。

2. 学生へのインタビュー調査の方法

学生に対するインタビューは以下の手続きで行った。インタビューは、2004年度に大阪商業大学で社会調査法Ⅱを履修していた学生の中から、11名（学年は2～4年生）に協力を依頼した。

当該の学生には、インタビューの趣旨を説明した上で、事前に簡単な質問紙（図1）を配布し、自記式で回答を記入してもらった。事前の質問紙は、主に学生がJGSS-2000の留置調査票の中でどのような調査項目に関心をもつのかを調べることを目的としている。合わせて、学生の基本属性やテキストについての基本的な態度を調べている。インタビューには、回答済みの質問紙を持参して参加してもらい、対話を進めるときの参考にしてもらった。

インタビューは1対1ではなく、グループ単位で行った。学生同士の会話の中から学生ごとの異質性を観察するためである。1グループは3～4名を単位として11名を3つのグループにわけた。

インタビュー内容は強く構造化せず、以下のように大きな枠組みだけを定めて、学生の会話を促した。

2005年1月

社会統計学のテキスト作成にかかわるアンケート

問1 あなたの性別・学年・氏名を教えてください。(※個人を特定してアンケートの結果を公開することはありませんが、インタビューの結果と照らし合わせるために記入をお願いします。)

男性・女性 _____年 氏名 _____

問2 あなたは社会調査法Ⅰ〔前期〕の授業内容をどの程度理解できたと思いますか。(※当然ですが、回答が成績に影響することはありません。)

1	2	3	4	5
ほとんど理解できなかった	半分は理解できなかった	半分は理解できた	大部分は理解できた	ほとんど全て理解できた

問3 あなたは社会調査法Ⅱ〔後期〕の授業内容をどの程度理解できたと思いますか。

1	2	3	4	5
ほとんど理解できなかった	半分は理解できなかった	半分は理解できた	大部分は理解できた	ほとんど全て理解できた

問4 あなたは数学が得意ですか、苦手ですか。

1	2	3	4
得意	やや得意	やや苦手	苦手

問5 あなたは統計学が得意ですか、苦手ですか。

1	2	3	4
得意	やや得意	やや苦手	苦手

問6 一般に、大学で用いる教科書はどうあるべきだと思いますか。以下のそれぞれについて、それがどの程度必要なことと思うか、お答えください。

	あまり必要ない	いくらか必要	必要
A 基本的なことが書かれていること	1	2	3
B 実践的なことが書かれていること	1	2	3
C 最新の知識が書かれていること	1	2	3
D 説明が詳しいこと	1	2	3
E 価格が安いこと	1	2	3
F 分量が多いこと	1	2	3
G 分量が少ないこと	1	2	3

問7 「生活と意識についての国際比較調査」の1つ1つの質問項目に目を通し、あなた自身がそれぞれの調査結果にどの程度関心があるかを教えてください。(※参考までに、この調査では性別・年齢・職業・家族構成などの基本的な情報は別途、尋ねられています。)

	調査結果への関心が……				
	弱い	←————→			強い
Q1 新聞を読む頻度	1	2	3	4	5
Q2 本を読む頻度	1	2	3	4	5
Q3 テレビの視聴時間	1	2	3	4	5
Q4 最近の家計の変化	1	2	3	4	5
Q5 家計の主観的な評価	1	2	3	4	5
Q6 昔の家計の主観的な評価	1	2	3	4	5
Q7 生活水準向上の機会	1	2	3	4	5
Q8A 満足度(居住地域)	1	2	3	4	5
Q8B 満足度(余暇)	1	2	3	4	5
Q8C 満足度(家庭生活)	1	2	3	4	5
Q8D 満足度(家計)	1	2	3	4	5
Q8E 満足度(友人関係)	1	2	3	4	5
Q8F 満足度(健康状態)	1	2	3	4	5
Q9A 実務講座の受講経験	1	2	3	4	5
Q9B 教養講座の受講経験	1	2	3	4	5
Q10 健康状態	1	2	3	4	5
Q11 階級意識	1	2	3	4	5
Q12 三代同居への賛否	1	2	3	4	5
Q13A 子どもにとって離婚はよいか	1	2	3	4	5
Q13B 妻にとって離婚はよいか	1	2	3	4	5
Q13C 夫にとって離婚はよいか	1	2	3	4	5
Q13D 男性は家事をすべきか	1	2	3	4	5
Q14 晩後の世帯を信じるか	1	2	3	4	5
Q15 少年法改正への意見	1	2	3	4	5
Q16 死刑制度への賛否	1	2	3	4	5
Q17 裁判の判決は厳しすぎるか	1	2	3	4	5
Q18 旅行の頻度	1	2	3	4	5
Q19A 家族そろった夕食の頻度	1	2	3	4	5
Q19B 友人との集まりの頻度	1	2	3	4	5
Q19C 家事の頻度(夕食の用意)	1	2	3	4	5

図1 インタビュー前の質問紙(一部)

リサーチ・クエスチョン

データ解析の教科書について、学生の視点から教員が見落としがちな課題を探る

サブ・クエスチョン

A. JGSS 質問項目への関心について

どの質問項目に一番関心をもったか。(関心をもった理由は何か)

他の人と同じ意見か。

他の人の関心の中で意外に思ったりしたものはないか。

B. 教科書一般について

大学の教科書とはふつうどのようなものというイメージがあるか。

よかった教科書の体験。

嫌だった教科書の体験。

他の人と同じ意見か。

他の人の意見の中で意外に思ったりしたものはないか。

どんな教科書があれば嬉しいか。

C. データ解析の教科書について

教科書をあまり使わない授業はどうだったか。

こんな教科書があればよかったというイメージは。

データ解析の実践と講義はどちらが好きか。（その理由は）
なるべく他の人と違う意見がある部分を明確にする。

3. 学生調査からわかる課題の断片

3-1. 関心の強い／弱い調査項目

以下に、学生に対するインタビューから読み取られた学生の視点を、データ解析のテキスト作成の課題と結びつけながら、整理して示す。これらの整理は何ら客観的な手続きに従って導き出されたものではないが、学生の視点を事例的に示すことはできるはずである。

最初に、学生がJGSSの調査票の中からどのような調査項目に強い関心を示し、逆にどのような調査項目に弱い関心しか示さなかったのかを示す。具体的にデータ解析のテキストを作成する場合には、どのような調査項目のデータを例示のために用いるかを考えなければならない。教示すべき事柄に見合ったデータであればどのようなものでも目的を果たすことはできるが、できるだけ学生が関心をもちやすい調査項目で具体例を示す方が望ましい。データ解析への学習意欲が増すだけでなく、それをきっかけとしてデータ解析を越えた社会科学的な関心に発展する可能性があるからである。

今回のインタビューでは、事前に質問紙を用いてJGSS-2000のそれぞれの調査項目について学生の関心の強さを1～5点で主観的に測定している。表2は134個の調査項目の中から、平均的に学生の関心が強かった項目（平均4.00以上）と、関心が弱かった項目（平均3.00以下）を一覧にしたものである。11名の回答を一般化することはできないが、事例的にはある程度興味深い傾向を読み取ることができる。インタビューの結果と合わせていくつかのポイントを示しておこう。

当然のことであるが、学生は自分の生活にある程度関わる事柄に関心をもつ。それがもっともわかりやすいのは、日常生活の中での娯楽の頻度を尋ねるいくつかの調査項目である。スポーツやカラオケの頻度には関心をもつが、囲碁、将棋、麻雀の頻度にはむしろ関心が弱い。学生という立場にあるせいも、教育や学校への関心も強い。また、現在でなくとも近い将来の生活に関わってきそうな事柄にも関心が強い。政府の雇用対策や、結婚、子どもに関する意識を尋ねる調査項目が上位にあがっている。

念のため、インタビューにおいて、これらの項目になぜ関心をもったのかを尋ねてみたが、予想される回答しか返ってはこなかった。自分がよく行っていることや、自分が強い意見をもっている事柄について、世間の人々がどのように考えているのかを知り、自分の位置付けを認識したいという関心である。最終的にあくまで自分の位置付けという個人的な関心に結び付けられ、社会的な関心とは言いがたいことには注意が必要であると感ぜられた。

また、自分の生活と結び付けられた関心とは別に、表2からは社会的な意味が「わかりやすい」調査項目への関心が強いことが読み取られる。政府の各分野への支出量を評価す

表2 関心の強い／弱い調査項目

関心の強い項目 (4.00以上)		関心の弱い項目 (3.00以下)	
項目内容	平均	項目内容	平均
Q23H 政府の支出への評価(雇用対策)	4.55	Q50 同性愛への意見	2.00
Q29N 信頼の程度(警察)	4.36	Q31A 娯楽の頻度(将棋)	2.27
Q44 親による体罰への意見	4.36	Q31B 娯楽の頻度(囲碁)	2.27
Q45 教師による体罰への意見	4.36	Q57 宗教の信仰	2.36
Q13A 子どもにとって離婚はよいか	4.27	Q05 家計の主観的な評価	2.45
Q15 少年法改正への意見	4.27	Q63 配偶者の宗教の信仰	2.45
Q23A 政府の支出への評価(環境問題)	4.27	Q31C 娯楽の頻度(麻雀)	2.55
Q43K 家族についての意見(結婚は幸福)	4.27	Q11 階層帰属意識	2.64
Q20B 国か個人か(高齢者の医療・介護)	4.18	Q34 空き巣の経験	2.64
Q22C 選挙に投票しなくてもよいと思うか	4.18	Q30B 組織への所属(業界団体)	2.73
Q23B 政府の支出への評価(犯罪の取締)	4.18	Q06 昔の家計の主観的な評価	2.82
Q23C 政府の支出への評価(教育)	4.18	Q29B 信頼の程度(宗教団体)	2.82
Q23G 政府の支出への評価(社会保障)	4.18	Q30A 組織への所属(政治団体)	2.82
Q31J 娯楽の頻度(スポーツ)	4.18	Q42 自分の墓についての意見	2.82
Q08C 満足度(家庭生活)	4.09	Q48 配偶者以外との性交渉への意見	2.82
Q23E 政府の支出への評価(海外援助)	4.09	Q51 ポルノへの意見	2.82
Q29C 信頼の程度(学校)	4.09	Q52 ポルノの規制への意見	2.82
Q31H 娯楽の頻度(カラオケ)	4.09	Q10 健康状態	2.91
Q43H 家族についての意見 (子どもの必要性)	4.09	Q14 死後の世界を信じるか	2.91
Q67 家計の管理方法	4.09	Q30E 組織への所属(宗教団体)	2.91
Q08B 満足度(余暇)	4.00	Q30F 組織への所属(スポーツ)	2.91
Q13D 男性は家事をすべきか	4.00	Q35 強盗の経験	2.91
Q20A 国か個人か(高齢者の生活保障)	4.00	Q19D 家事の頻度(洗濯)	3.00
Q22D 議員は信用できないか	4.00	Q43I 家族についての意見(女性の仕事)	3.00
Q23D 政府の支出への評価(安全保障)	4.00	Q53 セックスの頻度	3.00
Q29I 信頼の程度(裁判所)	4.00	Q56 ドナーカードの所持	3.00
Q29K 信頼の程度(国会議員)	4.00	Q59 保革意識	3.00
Q36 心の傷を受けた経験	4.00	Q66B 配偶者の家事の頻度(洗濯)	3.00
		Q66C 配偶者の家事の頻度(買い物)	3.00

る調査項目については軒並み強い関心を示している。警察への信頼の程度や少年法の改正についての意見なども上位に上る。ある意味で非常にまじめな関心のもち方である。

インタビューを通してこれらの項目に関心をもつ理由を尋ねたところ、いわゆる新聞社などが行う「世論調査」のイメージを強くもつことで、これらの調査項目に関心を示していることがわかった。つまり、この調査結果をもとにして、世論を反映した施策を行うように行政機関に意見を申し立てるべきだ、と考えている。少なくとも、JGSS という調査はそのような目的をもっていないし、学術的な社会調査の多くは、そのような方向性は弱いであろう。しかし、実際に学生が生活の中で触れる社会調査の代表はやはり世論調査であり、世論調査をもとにしたマスコミ報道などの影響を強く受けているということが、イ

インタビューの結果から浮かび上がった。すでに述べたとおり、社会調査のデータ解析を学習する学生に対しては、特定の学問分野についての基礎的素養の共有を求めにくい。そのため、このような「わかりやすい」調査項目で関心を維持することは重要であると考えられるが、仮説検証や探索的分析といった一般的なデータ解析の方向性からかけ離れてしまう危険をはらんでいることには注意が必要である。

逆に学生が関心を示さない調査項目として、同性愛への意見、ポルノへの意見、セックスの頻度など、一連の繊細な調査項目が上位にあげられている。この種の事柄について信頼のおける調査結果は少ないので、JGSSの調査結果は貴重である。そのため、一定の関心を示すであろうと予想していたが、逆に関心が非常に弱いという結果は意外であった。そこで、なぜこれらの項目に関心がないのかインタビューを通して確認したところ、これらの項目に限らず、「個人が判断すべきプライベートなことで、他人がその行動・意識について口出しをすべきでない」と考えられる事柄について関心が弱いことがわかった。「人の勝手なのに、そんなことを調査してどうするのか」という感想をもつようである。あらためて確認してみると、宗教や墓に関する調査項目や、各種団体への所属、ドナーカードの所持など、なるほどそのような調査項目への関心が弱い。

ここでもやはり「社会調査＝世論調査」というイメージが関心の弱さを方向付けているようである。つまり、「調査結果がどうであれ、そのようなことは個人が自由にすべきことであって世論は関係ないはずだ。なぜそのようなことを調べているのか理解できない」と考えている。いうまでもなく、学術的な社会調査では、その調査結果をもとにして誰かに行動や意見を変えるように迫るといよりも、より単純に人々の行動や意識を形成する要因を探り、その構造を知ることを目的にしている面が強い。そのため、世論調査的には意味がない調査項目でも、重要な社会的意味をもつことは多いのであるが、学生にはそのような前提は通用しないということである³⁾。

まとめると、学生が強い関心を示す調査項目は、自分の現在（あるいは近い将来）の生活と関連が深い事柄が、世論調査的な意味が「わかりやすい」調査項目である。そのような調査項目を例示などに活用すれば、学生の関心を維持する上で有効であると考えられるが、一方で世論調査的でない調査・分析関心の方向性を理解する上でその種の例示に偏ることは避ける必要がある。インタビューの結果は、世論調査的な関心を離れた社会調査の意義を学生が理解することが予想以上に困難であるという課題を示している。

3-2. 学生がテキスト一般に求めること

Kuhnによれば、テキストとは一般に「一連の定説を説明し、その応用を示し、さらにその適用例と観察・実験とを比較する」ものである⁴⁾。つまり、その分野で共有されている知識について、理論、応用、事例にまたがって整理したものがテキストである。

3) 余談であるが、「社会調査＝世論調査」というイメージは、調査の実施にあたって調査対象者の理解を得る際にも、困難の原因となっていると考えられる。学生に対して、世論調査的でない調査項目の重要性を簡潔に理解させる方法と、調査対象者に対して同様のことを理解させる方法には通じるところがあり、この問題は社会調査の回収率の低下問題とも結びつく重要な課題である。

4) Kuhn, Thomas S. *The Structure of Scientific Revolutions*, University of Chicago Press, 1962. (=中山茂訳『科学革命の構造』みすず書房、1971、12頁。)

しかし、教員の側から当然と思っているものが学生に共有されているとは限らない。学生は大学で用いるテキストの役割をどのように位置づけ、何を期待しているのか。まとめると、インタビューを通して、学生が「テキストは復習のための道具である」という認識をもっていることが明らかになった。

学生が標準的と考えている受講態度は以下のように整理される。まず何ら予習は行わず授業を受ける。授業中は教わることをすべて理解する必要はない。何が理解すべきことなのか、授業の重要なポイントは何なのかを知ることに意識を集中させる。重要なポイントがわかったところで、授業後にそのポイントについて調べ復習することではじめて内容を理解する(学生は「見直す」と表現する)。これを授業後にすぐ行うか、テスト前にまとめて行うかは人による。この復習のときに参照するものがテキストであると位置付けている。

そのようなわけで学生がテキスト一般に対して求める事柄は、比較的明確であり、またどの学生にもおおまかに共有されていた。例えば、テキストのどの部分が授業と対応しているのかが明確にわかることは、最低条件である。いくらその学問分野について網羅的に整理されていても、どの部分が授業の内容と対応しているのかがすぐにわからなければ、そのテキストは利用できないものとみなされる。

また、索引の重要性は、ほとんどの学生が指摘した。授業で聞いた重要な用語について書かれている部分をテキストの中から探すためである。復習の前には授業内容を十分に理解しているわけではないので、目次を見ても探している内容がどこに書かれているのかわからない。ずばりこの用語に関することは何ページに書かれている、という情報を求めているわけである。「索引があれば目次はいらない」とまで言う学生もいた。さらに用語集が付いていると、何が重要な用語なのかを確認しつつその内容がわかるので、復習には最適なテキストであるらしい。

さらに、とにかく基本的なことがイチから書かれていることが重要であり、ここまでは知っているはずということを前提にしたテキストは好まれない。専門家を対象にした書籍をテキストに指定することは、学生から最低の評価が下される。そのようなテキストを指定している場合には、おそらく授業中に基本的な事柄については補足説明がされているであろうが、先に述べたように、学生が標準的と考えている受講態度では、授業中に授業内容を理解していなくともよいと考えているので、この補足説明は頭に残っていない。復習の際に理解しようとして初めてわからないことに気づくわけである。

最後に、例題や演習問題を非常に重視していることも、インタビューからわかった。学生は自分が本当に内容を理解できているのかどうか確認できる手段を強く求めている。授業中に内容を理解していれば、自分の理解と教員の説明が一致していることでそれを確認することができるが、授業中は内容を理解しないまま、復習の際に初めて内容を理解するので、独りでその確認ができる手段として、例題や演習問題の存在を求めているわけである。自分の理解にもとづいて問題を解き、解答が一致していれば理解に自信をもち安心することになる。

以上のように、学生はテキストを復習のための道具と位置付けており、テキストに対する具体的な要求もそのような位置付けから理解できる。学生がテキストに対してもってい

るイメージに合わせてテキストを作成しなければならないわけではないが、少なくともどのようなイメージをもっているのかを念頭に置いた上でテキストを作成することは必要であろう。ある一定の共有すべき知識を網羅的に伝達することを前提にしながら、「見直し」に配慮したテキストの作成が課題となる。

3-3. 学生がデータ解析のテキストに求めること

前節では、テキスト一般について学生がもつイメージとそれに求めることについて、インタビューの結果から知り得たことをまとめたが、この節では特にデータ解析のテキストについて学生が求めることについて、整理する。ただし、インタビューの結果、学生が特別にデータ解析のテキストについてのみ求めている具体的な事柄はあまりなく、多くの事柄は他のテキスト一般と共通の要求であった。当の担当教員がインタビューアであるため、直接的な授業批判に繋がるような発言がしにくかったという可能性もあり、十分なインタビューができていないということも考えられるが、以下にインタビューで指摘されたいくつかの断片的な注意点を列記する。

インタビューにおいてもっとも多くの学生が指摘したことは、とにかく例題や演習問題を充実させてほしい、ということであった。この点はテキスト一般についても同様な指摘があったが、データ解析のテキストにおいては特に学生の理解を自己判断する中心となるので、要求が強かった。また、そもそもまず例題を見ることで何を学習しようとしているのかイメージをもった後に抽象的な方法論を教わった方が、理解が容易である、という指摘もあった。このような指摘はもっともなことであり、例題や演習問題の充実を図ることは必要であると考えられるが、同時に例題や演習問題に学習内容のイメージが引きずられる危険性が感じられた。例題や演習問題が重視される以上、その選別には一層の慎重さが必要であろう。

やはり演習問題に関することであるが、やや意外な指摘として、発展的な難問がいくらか欲しいという学生が何名かいた。学習に刺激を与える意味で、基礎的な問題ばかりでは飽きるという指摘である。この意見については別の学生からテキストなのだから基礎だけでよいという反論もあり、意見が分かれた。難問であることを明記した上で、いくつかの発展問題を加えることは可能であろうが、そのような領域はむしろ教員の裁量に任せ、テキストでは触れない方がよいかもしれない。

また、やや瑣末なもの意外な指摘として、統計ソフトなどを用いた実習的な内容については、ソフトの操作方法などを含めて細かい記述をしてほしいという具体的な意見があった。理由を尋ねたところ、コンピュータを使って実習を行う際には、説明を聞きながらコンピュータを操作しなければならないので、通常の講義のときに比べてノートを取ることが難しく、そのためなるべく全てがテキストに書かれてほしい、ということであった。私自身は、ソフトの操作方法などはテキストの本題ではなく、またバージョンアップなどにより頻繁に変更されるので、あまり詳細な記述は必要ない（むしろ記述が詳しいとそちらに気を取られて望ましくない）と考えていたが、学生の側からはそのような難点もあることを知らされた。

4. 結 論

本研究ノートでは、社会調査士資格の取得を希望する学生に向けたデータ解析のテキストを作成する上での課題を探るために行った学生インタビューから明らかになった事柄を整理した。特定の大学に在籍する11名のインタビューの結果を一般化することはできないが、ある種の学生がテキストに対してもつイメージや要求をある程度明らかにすることができたように思える。

断片的な事柄の中で特に以下の2点は重要であろう。第1点目は、学生は「社会調査=世論調査」というイメージを強くもっており、世論調査的にその意義が「わかりやすい」調査項目に関心をもちやすいということである。世論調査的な調査項目を説明の例示に用いることで学生の関心を維持することは容易になるが、同時に因果関係の構造を探ることを目的としたデータ解析の方向性をぼやけさせる危険性があるので、世論調査的な関心をどのようにテキストの作成に活用するかは慎重に考慮する必要である。

第2点目は、学生は一般的にテキストを「復習のための道具」として位置付けているということである。索引の重視、例題や演習問題の重視など、学生がテキストに対して求める事柄の多くは、この認識で説明することができる。やはり学生の認識にそのままおもねることは避けなければならないが、少なくともそのような認識をもっていることを知った上で対処を考える必要はある。

いずれについても、学生の視点を踏まえた上で、本来のテキストが果たすべき役割を満たしているテキストを作成する工夫が求められる。最近『社会学評論』では社会学のテキストについて再考する特集が生まれ、日本の社会学テキストに「革命」があったことが指摘されているが⁵⁾、データ解析を含め社会調査に関係するテキストは、そのような革命からは一歩距離を置いているように感じられる。社会学分野の中にあっては、社会調査は標準的な知識・方法を強力に共有しているためであろう。しかし、旧態のまま学生の関心・理解が得られるわけではない。学生の関心を維持しながらその本来の役割を損なわないテキストを開発することが、まさに現在求められている。

〈付記〉

本研究は平成16年度大阪商業大学研究奨励助成費により行った。

5) 友枝敏雄・園田茂人「特集「テキストに映し出される社会学の知：大学の大衆化とテキスト革命」によせて」『社会学評論』vol.56、No.3、2005年12月、p.566。